



幼少の頃から、榛原と三重県の名張には母親の仕事によくついていった。というより、ついていかざるを得なかった。片親であったから、僕を一人にさせることが不安で仕方なかったと思う。

宇陀市榛原から以东は三重県であり、三重に入ったところが名張である。なので三重県といっても奈良県の隣にある。

ここに住む人たちはたいがい通勤は大阪、買い物もほとんど名張以西であるから、僕には他県という感覚があまりない。

私が通っていた大学は三重にあり、奈良から通学で毎日この名張を通過してい

た。名張に住む友達もでき、お互いの家を行き来していた。名張はすっかり私の中では把握できている、と思っていた。

その名張の友人の父親が亡くなられたときに、告別式に参列させていただいた。大学2年か3年だったか。

そのお葬式で民俗学的に貴重な光景を見ることになる。つまり土葬だ。竹製だったかのカゴにご遺体を収容し、親族が土葬する場所まで行列をなして担いでいくのである。その光景を友人の家の前で見送った。

このように名張は身近な存在であると思ひ込んでいたのに、実は全然知らなか

ったことを今回のぶらり旅で気付かされた。

ところで、歩くことの効用はいくらでもある。体力がそれとなくついてくる、気分転換にもってこい、暇な時間を有効に使える、それにも増して歩かないと気づかないことに気づく。

自動車、自転車など、様々な便利な移動方法を選択せずに、とりあえず歩く。カメラを持っても持たなくても、一定の距離を歩きさえすれば、新たな発見が待っている。発見があれば、想像力、推理力がはたらく。

名張はそういう町だった。



ぶらりと名張を訪れたのは、お盆前の土曜日。まず最初に、案内板を見るたびに前から訪ねたいと思っていたものの、その機会がこれまでなかった名張藤堂家邸跡。

藤堂高虎は私のような歴史音痴でも知っている武将だが、その養子高吉ともなると、???である。高吉は領地の今治からこの名張に移封されるが、名張の町を発展させるために、今治の商人や職人を招き入れた。そして今回歩いて感じた、現在に残るこの地の文化を形成した。

現存する藤堂家邸はごく一部らしい。

これでごく一部だとすると、全体はどれくらいの延床面積になるのだろう。想像もつかない。

縁側に腰を落とし、庭を向いてカメラを構える。翻って内部も撮影する。あらゆる角度、高さで構える。どのように動こうが、どこを撮影しようが職員から注意を受けることがなかった。

もっとも、受付は自動販売機だし、発売されたチケットを受付に座っている男性に渡しさえすれば良く、現にその男性、チケットのやり取りをする意外はずっと俯いて本を読んでいた。

目の前の本に全身全霊の精神を注入し

ているような雰囲気。あとは定刻になれば、閉めるべきところを閉めて帰るのみだ。

思いつきで家を出たのが、9時半頃で、電車に乗り込み名張には10時半頃についた。そろそろお腹が栄養を欲して





いるので向かう方向を東にとってみた。  
昼食は行き当たりで決めるつもりだ。  
道路が茶色の舗装された町並みは、こ  
ら辺では大抵古道もしくは古い町並みであ  
ることが多い。その茶色の道を見つけたの  
で歩いてみる。  
疎水が町並みに沿って流れている。覗い



さんが声をかけてくれた。  
中は広く、北側の開口が広いので、とて  
も明るい。  
入ってすぐにキッチンが見えたのでチラ  
見すると、結構な人数分のトレイが並べら  
れていたの、これから続々入ってくるの  
ではないかと思った。  
僕が一人目の客で一瞬寂しく思えたが、  
案の定次から次に客が訪れて、あっとい  
う間にいっぱいになった。店を出てからも駐  
車場に止めようとする車があった。逆によ  
く入れたなあと  
思った。  
オーダーしたのは日替わりラン  
チ。今どき950円  
で食べられるとあ  
って人気に違いな  
い。和風ハンバー  
グ（豆腐ハンバー  
グかも）をメイン  
にヘルシーな3種  
類のおかず、そこ  
に味噌汁と雑穀米  
が用意されてい  
た。デザートのリ  
モンゼリーは喉通  
しよくお腹に入っ  
ていった、  
今度は平日に來  
て、カウンターでゆっくり本でも読みたい  
と思った。

てみるとメダカのような小さな魚が元気よ  
く群れをなして泳いでいた。  
登録有形文化財になっている立派な古民  
家も見かけ、さらに東に向いて数歩歩いた  
ところに「cafe mjuuk」さんの看板を見つ  
けた。明らかに古民家をリノベしているっ  
ぽい。よしっ、にここにしよう！



恐る恐る玄関を入り、なおかつ土間から  
2枚めの扉を開ける。「予約してないん  
ですが」と話かけた。というのも、まだ誰も  
席に座っていない、つまり閑散としていた  
のだ。それでてっきり予約で席が埋まりき  
っているのかと思ってしまったのだが、  
「大丈夫ですよ、どうぞ」と気さくな店員

化に完全に侵食され、少し古い時代のリア  
リティが目の前から静かに消滅していく寂  
しさをこの目で感じた。  
名張川は奈良県の高見山とその付近を源  
流とする。土地の勾配に忠実に従い、分流  
と合流を経て、2つの川が名張を囲むよう  
に流れる。住宅街をはずれば田園地帯が  
広がる米どころだが、町の人たちにとっ  
てもこの川の水は貴重であろう。  
水が流れる町は魅力的だ。目と耳、ひ  
ょっとすれば鼻で川の流れを感じる生活  
は、空気を吸うこと  
に等しく、必要な気  
がする。  
さらに西、すなわ  
ち大阪方向に歩く。  
レトロな建物が次第  
に増えてきた。町屋  
風の家屋が並ぶ。す  
でに閉業した銭湯  
「日之出湯」の看板  
が見えた。  
路地の脇に川が流  
れ、お風呂上がりの  
火照った体を、川面  
の冷気が運んでき  
て、気持ちよく進ん  
だのではないだろう  
か。  
もっと初瀬街道を  
西に進むと、「ぐいち」な交差点があり、  
そこには宇流冨志禰（うるふしね）神社の

一の鳥居が見えた。現在地から400mほど南下すると参拝できるが、今回はパスした。

